



Title	ウイルタ語における限定用法《形容詞》と名詞の語順：コーパス基盤の計量的アプローチによる構造パターンの検討
Author(s)	山田, 祥子
Citation	北方言語研究, 16, 101-120
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99339
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99339
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_Yamada.pdf



ウイлта語における限定用法《形容詞》と名詞の語順 —コーパス基盤の計量的アプローチによる構造パターンの検討—

山 田 祥 子
(室蘭工業大学)

キーワード：ウイлта語、ツングース諸語、形容詞、名詞、語順

1. はじめに

本稿は、ツングース諸語の一つであるウイлта語¹における限定用法《形容詞》と名詞の語順について、類型論の観点による Comrie (2025)をもとにコーパス基盤の計量的アプローチで構造のパターンを調べ、記述研究の立場から若干の考察を加えるものである。結論では、ウイлта語が《形容詞》-名詞（以下、AN）語順優勢の言語であると確かめた Comrie (2025)の方法論と主張を追認するとともに、使用頻度は低いながらもウイлта語で名詞-《形容詞》（以下、NA）語順が容認される論理を明らかにする。

本稿の本論は前半と後半に大きく分けられる。前半（第2節から第3節）は類型論に則った内容で、Comrie (2025)の延長線上にある。後半（第4節から第5節）では、前半の議論をふりかえりつつ、記述研究の立場からの考察を行う。

より具体的には、以下の構成で展開する。まず第2節で、類型論における Dryer (2013)および Comrie (2025)の議論の流れを紹介し、問題の所在を整理する。第3節では、Comrie (2025)の方法論を異なる資料に適用した追調査を行い、Comrie (2025)の本調査に統合した結果を報告する。その後、第4節で、ウイлта語の記述研究を行う立場から、前節の調査結果に対する考察と補足を加える。第5節で、ここまでの議論を踏まえ、AN語順が支配的なウイлта語においてNA語順も容認されうることの論理を明らかにする。第6節は結論として、本稿の議論を要約し、今後の課題を述べる。

2. 類型論の観点による問題の所在

2.1 Dryer (2013)によるウイлта語 NA 語順優勢説

議論の出発点は、世界中の諸言語の構造特性をさまざまな観点から記述するデータベースとして著名な WALS (The World Atlas of Language Structures ; 言語構造の世界地図) の「形容詞と名詞の語順」という一章にある。WALS Online, Id. 87 の「形容詞と名詞の語順」という章 (Dryer 2013) は、限定用法《形容詞》と主要部名詞の語順のパターンを検討し、世界地図にその分布を示した。

ここでいう《形容詞》について、Dryer (2013)による定義を原文のまま(1)に引用する。

¹ サハリン（樺太）島の中東部から北東部を主な居住地とする先住少数民族ウイлта（旧称オロッコ）の伝統的な言語である。方言は中東部のボロナイスクを中心とした地方で話される南方言、北東部のワールを中心とした地方で話される北方言に分けられる（池上 1994 [2001]による）。現在の話者数は二つの方言を合わせて 10 名未満とみられる。

- (1) For the purposes of this map, the term *adjective* should be interpreted in a semantic sense, as a word denoting a descriptive property, with meanings such as ‘big’, ‘good’, or ‘red’. It does not include nondescriptive words that commonly modify nouns, such as demonstratives (like *this* in *this dog*) [...], numerals (as in two dogs) [...], or words meaning ‘other’ (as in the *other dog*). (Dryer 2013)

つまり、意味論的に何らかの性質を表わす単語を《形容詞》と呼ぶ。指示詞、数詞、「他の」など、性質を表わさない語は《形容詞》から除外される。これは世界地図の上で言語構造の類型を俯瞰するための意味論的な定義で、形態統語論にもとづいた文法記述上の品詞分類を問題にしていない。本稿では品詞分類上の形容詞との区別を明示するため、Dryer (2013)の意味論的な定義(1)による *adjective* の訳語に《 》を付して表わす。なお、品詞分類については、本論の最後（第5節）で改めて触れることとなる。

Dryer (2013)は、「ヨーロッパとアジアを含む広大な領域」で AN 語順が支配的であるとしながら、そのなかで例外的にウイルト語を NA 語順優勢の言語に分類した。示された地図では、AN 語順優勢とされる周辺の諸言語のなかでウイルト語がいかに異質であるかのように見える (ibid.参照)。

2.2 Comrie (2025)の修正意見

WALS のウイルト語 NA 語順優勢説を取り上げ、理路整然とした修正意見を打ち出したのが Comrie (2025)である。Comrie (2025: 275-277)は、ウイルト語についての WALS の判断が、B. Piłsudski がポーランド語で著したウイルト語文法書を Dryer (2013)が誤って解釈したこと起因とした。そして、「ウイルト語における形容詞と主要部名詞の語順を最終的に決定づけるのは、文法書が述べる内容ではなく、言語の記録資料が示す内容であるべきだ」(Comrie 2025: 277) と強調した。

そこで Comrie (2025)は、ロシアや日本で既刊のテキスト資料から Dryer (2013)の定義にもとづく《形容詞》の用例を抽出してサブコーパスを作成し、AN*, NA*, NA-*ni**, NA-*ni*N* という4種の型（詳しくは 3.2.2 で後述）の出現頻度について延べ数と異なり数を調べた。表1（次頁）がその集計表である。

これらの型における《形容詞》は *core adjectival semantics* を有するものと *peripheral adjectival semantics* を有するものとに分類され (Comrie 2025: 288 参照；詳しくは 3.2.2 で後述)、表の中では前者が *Core*、後者が *Peripheral* と略記されている。

Dryer (2013)の基準では、ある語順が他の2倍以上出現すれば「支配的」とみなされる。Comrie (2025: 300)は「ウイルト語における AN:NA の比率は 73.8:26.2 であり、AN を支配的順序と特定するのに必要な最低値 (66.7:33.3) を明らかに上回っている」とし、ウイルト語は AN 語順が支配的な言語であると結論づけた。

表 1 《形容詞》と名詞の語順：さまざまな構造の延べ数と異なり数（Comrie 2025 による）

	延べ数				異なり数			
	Core		Core + Peripheral		Core		Core + Peripheral	
AN*	107	73.8%	143	79.0%	76	84.4%	100	87.7%
NA*	4	2.8%	4	2.2%	4	4.4%	4	3.5%
NA- <i>ni</i> *	27	18.6%	27	14.9%	5	5.6%	5	4.4%
NA- <i>ni</i> N*	7	4.8%	7	3.9%	5	5.6%	5	4.4%
NA 小計	38	26.2%	38	21.0%	14	15.6%	14	12.3%
合計	145	100.0%	181	100.0%	90	100.0%	114	100.0%

（Comrie 2005: 299; Table 9 より転載。日本語は筆者訳。Core, Peripheral は敢えて原典のままとする。）

2.3 Comrie (2025)により示された方法論の有効性と重要性

ツングース諸語ならびにアルタイ型の諸言語の基本的な統語特徴を踏まえれば、ウイルタ語で AN 語順が支配的という見解そのものは驚くに値しない。Comrie (2025)の強い主張はそこでなく、方法論にある。すなわち、言語の記録資料、とりわけテキスト資料を利用した、コーパス基盤の計量的アプローチの有効性と重要性である。

Comrie (2025)は既刊のテキスト資料をほぼ網羅的に調べているが、対象から外れたものもわずかにある。そこで次節では、Comrie (2025)の方法論を実践し、同論文の対象から外れた資料を用いて、限定用法《形容詞》と名詞の語順を調査する。

標本を替えて同じ調査を行う、という意味で、Comrie (2025)が行った「本調査」に対し、筆者が行うものを「追調査」と呼んでいる。追調査を行ったうえで、本調査に追調査の結果を統合してデータを拡張することにより、Comrie (2025)の方法論ならびに主張を検証するのが次なる第 3 節のねらいである。

3. Comrie (2025)の追調査と結果の統合

3.1 概要

第 3 節では、Comrie (2025)が行ったウイルタ語の限定用法《形容詞》と名詞の語順についての調査を、同一の条件のもとで、異なる資料に適用する。その結果を Comrie (2025)が行った本調査の結果と統合したら、本調査のみの結論（表 1）と比べて AN 語順と NA 語順の出現頻度の比率がどのように変わるかを観察し、3.4 の表 4 で集計し、結果報告をする。

この第 3 節は、類型論的な関心で行われた Comrie (2025)の本調査にもとづく考察となる。個別言語の記述研究を行う立場での意見は本節では必要最小限とし、基本的に次節（第 4 節）へと見送ることとする。

3.2 調査方法

3.2.1 《形容詞》の定義

《形容詞》の定義として、まず Dryer (2013)による(1)をウイルタ語に適用する。そのうえで Comrie (2025)において疑義があつて本調査から除外された以下の諸表現は、追調査の対象からも除外される。（これらの一部については 4.2 で改めて議論する。除外された理由に

についても 4.2 で一部取り扱う。)

- ・ 民族名称を含む表現 (例: *uilta nari-sal*; *uilta man-PL* 「ウイルタの人々」)
- ・ 性別を限定する表現 (例: *əəktə bəjə*; *female bear* 「雌グマ」)
- ・ 数量を表わす語 (例: *bara*; *many* 「たくさん (の)」) を含む表現
- ・ 所有接尾辞-*lu* を含む表現 (例: *lauta-lu jangee*; *sword-PROPR official* 「刀をもった役人」)
- ・ 空間を表わす表現 (例: *dəunjee isal*; *left eye* 「左の目」)

(Comrie (2025: 295-299)にもとづく)

Dryer (2013), Comrie (2025)のどちらも、限定用法《形容詞》について論じた。したがって追調査でも基本的に限定用法のみを対象とし、同一の語でも明らかに叙述用法とみられる構造をとる例は対象外とする。

3.2.2 構造の分類

ウイルタ語の限定用法《形容詞》と名詞を含む構造は、Comrie (2025: 283-287)により、(i)～(iv)の4種の型に分類される。《形容詞》と名詞の配列のみを問題にする一般的な分類(AN語順とNA語順)から区別するため、各構造の末尾に*が付される。語境界は構造パターンの名称としては示されない。これらの方針を含めて本稿はComrie (2025)の用語に合わせる。ただし、《形容詞》の略号であるA、名詞の略号であるNに対し、*-ni* (三人称所有語尾)はウイルタ語の音形そのものであるということを明確にするため、本稿では敢えて*-ni*の部分のみ斜体に変更する。例えば、下記の(iv)では斜体の*-ni*がウイルタ語の形式で、後続する正体(直立した字体)のNは(語境界を跨いでその次の)名詞という意味である。(一見*-*niN*という接辞のようだが、そうではない。)

- (i) AN*型: 《形容詞》に主要部名詞が後続するもの (例: *daaji bəjə*; *big bear*)
- (ii) NA*型: 主要部名詞に《形容詞》が後続するもの (例: *bəjə daaji*; *bear big*)
- (iii) NA-*ni**: 主要部名詞に、三人称所有語尾-*ni* 付きの《形容詞》が後続するもの (例: *ulaa masi-ni*; *reindeer strong-3SG*)
- (iv) NA-*niN**型: (iii)の構造の後ろに主要部名詞が繰り返されるもの (例: *gasa daaji-ni gasa*; *bird big-3SG bird*)

それぞれの型につき、Comrie (2025)は *core-semantic adjectives* 「中核的意味論の《形容詞》」を含むものと *peripheral-semantic adjectives* 「周辺の意味論の《形容詞》」を含むものとに分けて計数した。Comrie (2025: 288-291)によると、前者は共時的な観点で単一の形態素から成る《形容詞》、後者は接尾辞の付加による[形態統語的な]派生にともない[意味論的にも]《形容詞》となったもの、とみなされる([]内は筆者補足)。その区分は「多少、主観的」とComrie (2025: 288)自身が述べたとおりで、見方によって疑義が生じる。例えば知覚関連の《形容詞》に共通する接尾辞-*uli* を含む *aptauli* 「おいしい」や *namauli* 「あたたかい」など、ならびに、*irga* 「模様」から派生した *irgala* 「模様のある」は、*core-semantic* として計数

されているが、これらを *peripheral-semantic* に加える見方もあるだろう。だが、ここで行う追調査では、見方の違いは問題とせず、Comrie (2025)の本調査の区分に合わせる。

3.2.3 対象とするテキスト資料

Comrie (2025)が用例を抽出する対象としたテキスト資料の条件は下記のとおりである。

- a) すでに公刊されている
- b) 散文テキストである
- c) オリジナルである（他言語からの翻訳でない）
- d) 口頭で話されたテキスト²から書き起こされたものである
- e) 他の資料と重複していない

(Comrie (2025: 278-279)にもとづく)

追調査を行った 2025 年 8 月時点で、上記 a～e の条件を満たし、かつ、Comrie (2025)が対象としなかったテキスト資料は、Toldova & Brykina (2009)、風間 (2011)、佐藤ほか (2014)の一部³、森貝 (2016)、山田 (2013, 2025)の一部⁴であった。これらを追調査の対象とした。一覧を表 2 (次頁) に示す。

表 2、および、3.3 全体の例文では、Comrie (2025)が行った本調査の方針にもとづき、著作者の略語にページ番号やセンテンス番号をアンダーバーで接続した文献略号で典拠を示す。例えば、「St_65_332」は「佐藤ほか (2014: 65) のセンテンス番号 332」を意味する。出典にセンテンス番号がない場合はページ番号のみを表わす。例えば、「Kz_70」は「風間 (2011: 70)」を意味する。山田 (2025) では章節番号とセンテンス番号を組み合わせた固有番号が付されており、ページ番号の表記にあまり意味がないので、ページ番号を省略する。例えば、「Ym_10_02_07」は「山田 (2025) の第 3 節のセンテンス番号 7」を意味する。

なお、第 4 節では通常の引用形式に戻すこととなる。

² ウイльта語に固有の文字はないが、2008 年に池上二良が監修した教科書（文字教本）(Ikegami et al. 2008) が刊行され、キリル文字を基調とした書記法が定まった。その後、母語話者の手によりウイльта語で著述されたものが刊行されている（山田 2024: *passim.*）。追調査は Comrie (2025)の本調査にならい、話されたテキストを対象を限定する。なお、話者が読み原稿を予め用意して話したテキストの場合、書き言葉の影響を排除できないので判断が難しいところだが、資料化されたのは音声のほうであり読み原稿ではないので、調査対象に含める。

³ 佐藤ほか (2014) のテキストは、散文調の語りの部分と、節（ふし）をつけて語る部分で構成される。条件 b により、語りの部分のみを調査対象とする。

⁴ 山田 (2025) に収載されたテキストから、Comrie (2025)で調査済みのものを除く。Comrie (2025)で Ym_01～Ym_08 の略号を使用済みなため、本稿では Ym_09 で開始する。

表 2 追調査の対象とするテキスト資料

	文献情報	文献略号	方言	話者 ⁵	採録年	備考
1	Toldova & Brykina (2009)	TB	南方言	MS	2008	ただし該当例なし
2	風間 (2011)	Kz	北方言	BE	2010	
3	山田 (2013) 7.1.3	Ym_09_01	北方言	KL	2010	
4	山田 (2013) 7.2.1	Ym_09_02	北方言	FI & KL	2010	話者 2 名の会話
5	佐藤ほか (2014)	St	南方言	N	1977	謡う部分は対象外
6	森貝 (2016)	Mr	北方言	BE	2010	
7	山田 (2025) 2	Ym_10_01	北方言	FI	2011	
8	山田 (2025) 3	Ym_10_02	北方言	FI	2011	
9	山田 (2025) 4	Ym_10_03	北方言	FI	2014	
10	山田 (2025) 6	Ym_10_04	北方言	BE	2010	
11	山田 (2025) 16	Ym_10_05	北方言	FI	2014	
12	山田 (2025) 17	Ym_10_06	北方言	FI	2014	
13	山田 (2025) 19	Ym_10_07	北方言	BE	2010	
14	山田 (2025) 20	Ym_10_08	北方言	BE	2011	
15	山田 (2025) 21	Ym_10_09	北方言	BE	2011	

※ 文献情報の列において山田 (2013, 2025) に後続する数字は章節番号

3.3 調査結果

3.3.1 AN*型

先に表 1 で示したように Comrie (2025) の本調査で確認された AN*型は延べ 143 例（異なり数で 100 例）、そのうち、core-semantic は延べ 107 例（異なり数で 76 例）、peripheral-semantic は延べ 36 例（異なり数で 24 例）だった。

筆者の追調査では、AN*型が延べ 34 例（異なり数で 26 例）確認できた。そのうち、core-semantic は延べ 29 例（異なり数で 21 例）（表 3.1.1）、peripheral-semantic は延べ 5 例（異なり数でも 5 例）（表 3.1.2）だった。

以下、用例を示す表は Comrie (2025) の Table 2~8 と照合しやすいよう形式を合わせてある。

⁵ すべての文献で話者の氏名が公表されているので匿名にする必要はないが、ここではデータの異同を示す目的に特化するため略号にしておく。

表 3.1.1 追調査で確認した core-semantic な《形容詞》による AN*の例

A 《形容詞》	N (名詞)	文献略号	頻度	
			延べ数	異なり数
<i>aja</i> 「良い」	<i>sooniji</i> 「剛の者」	St_65_332	1	
<i>aptauli</i> 「おいしい」	<i>solu</i> 「和え物」	Ym_10_03_15	1	
<i>baaju</i> 「怠惰な」	<i>nari</i> 「男、人」	Ym_10_02_07	1	
<i>daaji</i> 「大きい」	<i>bəlu</i> 「氷 (山)」	Kz_70	1	
<i>gəəgdə</i> 「きれいな」	<i>muu</i> 「水」	Ym_10_08_06, 08, 12	3	
<i>nučiikə~nučuukə</i> 「小さい」	<i>paama</i> 「ガンコウラン」	Ym_10_03	1	
	<i>nəu</i> 「弟妹」	Kz_68, Mr_146	2	
	<i>nəəčigə</i> 「小鳥」	St_93_572	1	
	<i>puril</i> 「子どもたち」	Ym_09_01_03	1	
	<i>kusok</i> 「一切れ」	Ym_09_02_03	1	
<i>orki</i> 「悪い」	<i>saŋnaska</i> 「煙」	Kz_68	1	
<i>paaji</i> 「浅い」	<i>uŋaatal</i> 「小川」	Ym_10_08_05	1	
<i>paamaak</i> 「山積みの」	<i>abdu</i> 「家財道具」	St_52_213	1	
<i>saari</i> 「黒い」	<i>tamna</i> 「霧」	St_104_683	1	
<i>səəgdə</i> 「赤い」	<i>muu</i> 「水」	Ym_10_08_07, 11, 13	3	
	<i>tamna</i> 「霧」	St_104_681, 682	2	
<i>suddəəki</i> 「ひどい」	<i>puttə</i> 「子」	Ym_10_01_29, 33	2	
	<i>ənuu</i> 「病気」	Mr_145, 152	2	
<i>suunə</i> 「晴れた」	<i>inəŋi</i> 「日」	Kz_67	1	
<i>uliŋga</i> 「良い」	<i>nari</i> 「男、人」	Ym_10_01_51	1	
<i>xəkkuuli</i> 「熱い」	<i>ilda</i> 「油」	Ym_10_05_04	1	
合計			29	21

表 3.1.2 追調査で確認した peripheral-semantic な《形容詞》による AN*の例

A 《形容詞》	N (名詞)	文献略号	頻度	
			延べ数	異なり数
<i>čeenee-pči</i> 「昨日の」	<i>kəsə</i> 「ことば」	St_42_105	1	
<i>məŋu-mə</i> 「銀製の」	<i>omoo</i> 「湖」	St_58_269	1	
	<i>əmuwə</i> 「ゆりかご」	St_58_273	1	
	<i>məgdə</i> 「岸边」	St_78_450	1	
	<i>noori</i> 「矢柄」	St_80_459	1	
合計			5	5

(2)は core-semantic、(3)は peripheral-semantic の例である。以下、ウイルタ語の例文における表記とグロス⁶は本稿の方針に合わせて補足や改変を加え、着目したい限定用法《形容詞》と主要部名詞に当たる部分を太字で示す。

⁶ グロスは、基底形の分析、および、英語や略号を用いた形態素分析の2段階構成とする。基底形の行において、大文字の A は母音調和によって交替する母音を表わす。

- (2) ... *sorok shestoiduu sorok sed'moi godudu j̃iŋ ənuu*
 [sorok] [shestoi]-duu [sorok] [sed'moi] [godu]-du j̃iŋ ənuu
 forty sixth-ABL forty seventh year-DAT very disease
biččini, j̃iŋ suddəəki ənuu biččini.
 bičči(n)-ni j̃iŋ suddəəki ənuu bičči(n)-ni
 COP.PTCP.PFV-3SG very terrible disease COP.PTCP.PFV-3SG
 [前略]1946 から 1947 年にひどい病気があった、とても恐ろしい病気だった (Mr_145)
- (3) *tari omoo kiraduni geeda nudaa məjuma əmuwətai puttəə*
 tari omoo kira-du-ni geeda nudaa məju-mA əmuwə-tAi puttə+bA
 that lake shore-DAT-3SG one duck silver-ADJ cradle-DIR child+ACC
əmusinində əsigdəə təgdəəm.
 əmu-si-ni=ndA əsigdəə təgdəə(n)-mi
 cradle-PTCP.IPFV-3SG=HS now do.eagerly-CVB.CONN
 一つの池の岸に、一羽のカモが銀のゆりかごで子を寝かせて [懸命に] あやしているんだと。(St_58_273 ; [] は本稿における加筆)

3.3.2 NA*型

先に表 1 で示したように Comrie (2025)の本調査で確認された NA*型は延べ 4 例（異なり数でも 4 例）で、すべて core-semantic な《形容詞》によるものだった。

筆者の追調査では、表 3.2 のとおり、NA*型とみられるものを延べ 3 例（異なり数でも 3 例）確認した。(4)(5)はそのすべての例文である。本調査と同様に、peripheral-semantic な《形容詞》による NA*型は見つからなかった。

表 3.2 追調査で確認した core-semantic な《形容詞》による NA*の例

A 《形容詞》	N (名詞)	文献略号	頻度	
			延べ数	異なり数
<i>aja</i> 「良い」	<i>omoo</i> 「湖」	St_58_269	1	
<i>ulinga</i> 「良い」	<i>sundatta</i> 「魚」	Ym_10_09_25	1	
	<i>pəətə</i> 「アザラシ」	Ym_10_09_25	1	
合計			3	3

- (4) *ilaa omoo biinində, məjuma omoo, ənəjjeə omoo ajaa*
 ilaa omoo bii-ni=ndA məju-mA omoo ənəjjeə omoo aja+kA
 three lake COP.PTCP.IPFV-3SG=HS silver-ADJ lake INTJ lake good+EXC
omoo.
 omoo
 lake
 三つの池があるんだと、銀の池、あれまあ、なんて美しい池だ。(St_58_269) ⁷

⁷ 間投詞に引っぱられて感嘆文のような意識になっているが、感嘆を表わす特殊な構文ではない。(6)も同

- (5) *pəətə mapatai unʃini, bii sittəi tamaliwi ilaa*
pəətə mapa-tAi un-ri-ni bii sittəi tama-li-bi ilaa
 seal old.man-DIR say-PTCP.IPFV-3SG 1SG.NOM 2SG.DIR pay-PTCP.FUT-1SG three
anannee sundattalba, pəətəlbə baičissəəri, ʃiŋ ulingasalba. ...
anani+bA sundatta-l-bA pəətə-l-bA bəi-či-ssAAri ʃiŋ ulinga-sAl-bA
 year+ACC fish-PL-ACC seal-PL-ACC go.fishing-DUR-FUT.IMP very good-PL-ACC
 アザラシはおじいさんに言います、「私はおまえにほうびをやろう。3 年の間、魚とアザラシを獲り続けなさい、とても良いものを。[後略]」(Ym_10_09_25)

(4)には注意を要する。NA*の直後に同一の主要部名詞 *omoo* 「湖」が続くことから、本来は *?omoo ajani omoo* だったのではないか。筆者が音源を確かめたところ、発音が速くて音声的に不明瞭ではあるものの微かに *n* らしき音が聴き取れる。資料編集時に判断を誤って *ajani* を *ajaa* とした可能性がある⁸。もしそうだとすれば、(4)は NA*型でなく NA-*ni*N*型に含むべきである。(なお、(4)の前半部にある *məŋumə omoo* 「銀の湖」は表 3.1.2 に計上済み。)

(5)では、*sundatta* 「魚」と *pəətə* 「アザラシ (総称)」が名詞並列の関係にあり、その性質を限定する *ulinga* 「良い」が後ろに現れる。主要部名詞が 2 語あるため、延べ 2 例 (異なり数でも 2 例) と数えた。さらに、(5)では《形容詞》が主要部名詞の直後ではなく、二つ後ろの句にある。意味論的な定義(1)により《形容詞》とする *ulinga* 「良い」が主要部名詞と同じ対格語尾-*bA* をとっていることにも注目される。この例は、風間 (1994: 60-62, 77-78) が指摘した、修飾語の遊離を条件とする「一致」に該当するとみられる。このことについては 4.2.2 で改めて取り扱う。

3.3.3 NA-*ni**型

先に表 1 で示したように Comrie (2025)の本調査で確認された NA-*ni**型は延べ 27 例 (異なり数で 5 例) で、すべて core-semantic な《形容詞》によるものだった。

筆者の追調査では、表 3.3 (次頁) のとおり、NA-*ni**型が延べ 2 例 (異なり数でも 2 例) 確認できた。(6)はその例である。本調査と同様に、peripheral-semantic な《形容詞》による NA-*ni**型は見つからなかった。

- (6) *ənəjje takkaaptu ajani.*
ənəjje takkaaptu aja-ni
 INTJ juggling.ball good-3SG
 なんと、きれいなお手玉だ! (St_51_192)

様。

⁸ Sato et al. (2014)の編集は筆者が担当した。誤りだとすれば、筆者の責任である。さらに見方を変えると *?omoo, ajaa omoo* 「池、美しい池」のように同格で言い換えたという可能性も排除できない。ただ、先行の *omoo* と *ajaa* の間のポーズも聴こえず、可能性を補強する根拠もない。

表 3.3 追調査で確認した core-semantic な《形容詞》による NA-*ni**の例

A 《形容詞》	N (名詞)	文献略号	頻度	
			延べ数	異なり数
<i>aja</i> 「良い」	<i>soondoo</i> 「仔トナカイ」	St_80_458	1	
	<i>takkaaptu</i> 「お手玉」	St_51_192	1	
合計			2	2

(6)は、日本語の意識をもとに限定用法とみなして調査対象に加えたものの、強いて見方を変えれば叙述用法と捉えることもできる。その場合、逐語的には「なんと、お手玉がきれいだ」という訳になるだろう。前後の文脈を見ても、佐藤ほか (2014) の露訳者（ウイルト語の母語話者でもある）によるロシア語訳でも、この文が叙述用法である可能性を排除できない。この点、NA-*ni**型は曖昧性を含む構造といえる。

3.3.4 NA-*ni*N*型

先に表 1 で示したように Comrie (2025)の本調査で確認された NA-*ni*N*型は延べ 7 例（異なり数で 5 例）で、すべて core-semantic な《形容詞》によるものだった。

筆者の追調査では、表 3.4（次頁）のとおり、NA-*ni*N*が延べ 8 例（異なり数で 6 例）確認できた。(7)(8)はその例である。本調査と同様に、peripheral-semantic な《形容詞》をとまなう NA-*ni*N*型は見つからなかった。

- (7) *ənəjje gasa ajani gasa səgʃeenində.*
 ənəjje gasa aja-ni gasa səgdə+ri-ni=ndA
 INTJ bird good-3SG bird fly+PTCP.IPFV-3SG=HS
 なんとまあ、鳥のなかでも美しい鳥が飛んでいるんだと。(St_33_30)
- (8) *wəŋgai ajjaani wəŋgaiwa*
 wəŋgai aja+bA-ni wəŋgai-bA
 nonpregnant.female.reindeer good+ACC-3SG nonpregnant.female.reindeer-ACC
maatullarraa gaduxani əsigdəə.
 maatu-lA-rrAA ga-du-xA(n)-ni əsigdəə
 lasso-VBLZ-CVB.ANT take-REV-PTCP.PFV-3SG INTJ
 不妊のメストナカイのなかでも最も美しいのを投げ縄で捕まえて、連れていった。
 (St_53_219)

この NA-*ni*N*型について、Comrie (2025: 286)は「タイプ(iii) [NA-*ni**型] に主要部名詞の複製を後続する同格構文である可能性がある。したがって、形容詞は後続の名詞ではなく、先行する名詞に付随する」([] 内は筆者補足)と述べた。且つ、Comrie (2025)の本調査で対象とした資料のうち「池上 (2002) でしか見つからず、証拠となる用例が少ないため、特定の機能を推測するのは困難である」(ibid.)とした。

表 3.4 追調査で確認した core-semantic な《形容詞》による NA-*ni*N* の例

A 《形容詞》	N (名詞)	文献略号	頻度	
			延べ数	異なり数
<i>aja</i> 「良い」	<i>aəktə</i> 「女」	St_137_955, 957	2	
	<i>gasa</i> 「鳥」	St_33_30, 32	2	
	<i>gusi</i> 「ワシ」	St_53_222	1	
	<i>inəŋi</i> 「日」	St_49_174	1	
	<i>wəŋgai</i> 「不妊の雌トナカイ」	St_53_219	1	
<i>manga</i> 「強い」	<i>xədu</i> 「風」	St_93_568	1	
合計			8	6

このような構文は、Comrie (2025)が対象とした池上 (2002) でも、筆者が追調査の対象とした佐藤ほか (2014) でも「N のなかでも A な N」と分析され、ときには(8)のように「N のなかでも最も A な N」と、いわゆる最上級のような意識が与えられてきた (佐藤ほか 2014 の露訳も参照) ⁹。

意味の解釈には確認の余地があるものの、構造上は NA-*ni**型の拡張であり、NA-*ni*N*全体で一つの名詞句を構成しているという見方ができる。なお、叙述用法を含む関係節による構造という可能性も検討したが、そうすると分析が苦しくなってしまうので、ここでは限定用法の一種と捉える。

3.3.5 追調査の集計結果

以上、3.3.1～3.3.4 で報告した追調査の結果を集計したものを、表 3.5 に示す。

表 3.5 《形容詞》と名詞の語順 (筆者による追調査の結果)

	延べ数				異なり数			
	Core		Core + Peripheral		Core		Core + Peripheral	
AN*	29	69.0%	34	72.3%	21	65.9%	26	70.3%
NA*	3	7.1%	3	6.4%	3	9.4%	3	8.1%
NA- <i>ni</i> *	2	4.8%	2	4.3%	2	6.3%	2	5.4%
NA- <i>ni</i> N*	8	19.0%	8	17.0%	6	18.8%	6	16.2%
NA 小計	13	31.0%	13	27.7%	11	34.4%	11	29.7%
合計	42	100.0%	47	100.0%	32	100.0%	37	100.0%

Comrie (2025)が行った本調査の標本数 (延べ 181 例／異なり数 114 例) (cf. 表 1) と、筆者が行った追調査の標本数 (延べ 47 例／異なり数 37 例) とでは3倍以上もの差があり、本調査と追調査を同列に並べて比較するには客観性において不釣り合いである。そのため、ここでは本調査と追調査の比較は置き、次節で本調査と追調査の結果を統合してから比較す

⁹ 他の例でいえば、Comrie (2025)および本稿の調査対象ではないが、潤潟 (1981: 127) が *nari mangani nari* (*nari manga-ni nari*; man strong-3SG man)を「人の中でもいちばん強い人」と訳している。

ることとする。

3.4 本調査・追調査の結果の統合

Comrie (2025)による本調査の結果（表 1）に、筆者による追調査の調査結果（表 3.5）を統合したのが表 4 である。

表 4 《形容詞》と名詞の語順（Comrie (2025)の本調査と筆者による追調査の結果を統合）

	延べ数				異なり数			
	Core		Core + Peripheral		Core		Core + Peripheral	
AN*	136	72.7%	177	77.6%	95	79.8%	124	83.8%
NA*	7	3.7%	7	3.1%	7	5.9%	7	4.7%
NA- <i>ni</i> *	29	15.5%	29	12.7%	7	5.9%	7	4.7%
NA- <i>ni</i> N*	15	8.0%	15	6.6%	10	8.4%	10	6.8%
NA 小計	51	27.3%	51	22.4%	24	20.2%	24	16.2%
合計	187	100.0%	228	100.0%	119	100.0%	148	100.0%

Comrie (2025)が行った本調査のみの結果（表 1）と表 4 を比較すると、全体に対する AN の比率が 79.0%から 77.6%へ、わずかに下がっている。それでも、表のすべての列において AN が NA 小計の 2 倍以上となっていることから、ウイльта語において AN 語順が支配的といえる。

以上、第 3 節では、類型論における Dryer (2013)や Comrie (2025)の議論に則って、ウイльта語の限定用法《形容詞》と名詞の語順を観察した。結果、異なる標本を加えて調査範囲を拡大しても、Comrie (2025)の主張が定量的に裏付けられた。次節では、個別言語の記述研究へと観点を移して、考察を加える。

4. 個別言語研究の観点による考察と補足

4.1 方言差への着目

前節の調査とその結果を、ウイльта語の方言差を視野に入れた記述研究の観点で捉え直すと、おおよそ下記の傾向が見いだされた。

AN*型は生産的で、方言の偏りもみられない。かつ、表 1 や表 4 で確認できるように、peripheral-semantic な《形容詞》が名詞を修飾する用法は AN*型だけで確認され、他の型ではみられない。

NA*型は Comrie (2025)の本調査と筆者の追調査を合わせても用例が少ないうえ、(4)や(5)のような疑わしい例が含まれる。7 例中 5 例が北方言、残り 2 例が南方言で、どちらかといえば北方言に出現例が偏っている。

NA-*ni**型の出現は、追調査では南方言から延べ 2 例（異なり数でも 2 例）だけだったが、Comrie (2025: 294)の本調査で延べ 27 例（異なり数で 5 例）確認されている。二つの調査結果を合併すると表 4 のとおり延べ 29 例（異なり数で 7 例）である。延べ数の方言別の内訳は、南方言が「8」、北方言が「21」で北方言に偏っているものの、異なり数は南方言が「5」、北方言は「2」で、やや南方言に偏っている。特に北方言では延べ数「21」と異なり数「2」

の差が甚だ大きい。ただし、(6)で見た構造上の曖昧性にも注意を要する。

NA-*ni*N*型は、今のところ南方言でしか確認されていない。NA-*ni**型と比べると、延べ数と異なり数の差が小さいが、《形容詞》の種類が *aja* 「良い」, *manga* 「強い」, *gugda* 「高い」, *daaji* 「大きい」 の 4 種に限られる。

以上の考察を概略して、下記 4 点が明らかとなる。

- ・ AN*型は最も生産的で、peripheral-semantic な《形容詞》も含めて、方言差にかかわらず広く使用されている。
- ・ NA*型は出現が稀なうえ、表記や分類が疑わしい例が含まれる。
- ・ NA-*ni**型と NA-*ni*N*型は定型的な構造に限られる傾向がみられる。
- ・ NA-*ni*N*型は、北方言にはみられない。

この結果から、方言差を越えた一般性・生産性という観点でも AN*型が支配的といえ、定性的にも Comrie (2025)の主張が補強される。

4.2 取り残された問題

4.2.1 概観

ここで改めて第 2 節から第 3 節をふりかえると、実に多くのさまざまな問題を統計対象の脇に置いてきたことに気づかされる。Comrie (2025: 295-299)が「疑義があって除外した用例」として 1 小節を設けて報告し、3.2.1 でも確認した事項も、そのような諸問題の一部である。

以下では、ここまでの調査で取り残した問題のうち、数量を表わす語を含む語順、所有接尾辞-*lu* を含む語順の 2 点について確認する。

4.2.2 数量を表わす語を含む語順

数量を表わす語のうち *bara* 「たくさん (の)」や *ojuuka* 「少し (の)」は主要部名詞の前に立つこともあれば、後に立つこともある。Dryer (2013)の定義（本稿の(1)）では数詞が《形容詞》から除外されるが、この 2 語のような語を《形容詞》と捉えることは可能なはずだった。だが、Comrie (2025: 296)はこの 2 語を「形容詞ではない、あるいは形容詞の不規則な下位分類を構成しており、そのふるまいを支配的な語順を代表するものとはみなせない」とし、統計（本稿の表 1）の対象に含まなかった。とはいえ、どのような「ふるまい」をするのか、今後の記述研究のために少しでも確認しておきたい。

以下、*bara* の例文を挙げる。

- (9) *namu kiraduni* *əɾəəi j̥iŋ, bara bəlu j̥iŋ, daaji bəlu biini.*
namu kira-du-ni *əɾəəi j̥iŋ bara bəlu j̥iŋ daaji bəlu bii-ni*
 sea shore-DAT-3SG INTJ very many ice very big ice COP.PTCP.IPFV-3SG
 海の岸边にああすごくたくさんの氷山が、すごく大きな氷山がある。(風間 2011: 70 ;
 音韻表記の一部を本稿の方針に合わせて改変)

(10) <i>xudassiči</i>	<i>gumaaskaži</i>	<i>dəppee</i>	<i>barambaa</i>	<i>gažini, ...</i>
xudasi+ri-či	gumaaska-ži	dəppi+bA	bara(n)-bA+kAA	ga-ri-ni
trade+PTCP.IPFV-3PL	money-INS	food+ACC	many-ACC+EXC	buy-PTCP.IPFV-3SG
物を売って得るお金で食べ物をたくさん買うの、[後略]。(山田 2023: 12; 2025: 62)				

(9)では *bara* が主要部名詞の前に、(10)では主要部名詞の後に立つ。なお、両者は採録者が異なるが、話者は同一人物（表 2 の略号でいえば BE）である。

(10)で *bara* が主要部名詞と同じ対格語尾-*bA* をとっていることに着目したい。風間 (1994: 77-78) により、ツングース諸語の多くで、修飾語の遊離（本来の語順の逆転）に際して「一致」が起こること、主に数詞ならびに数量を表わす形容詞で遊離および「一致」がその使用の中心であること、それを起こす格はほとんど対格に限られることが指摘されている。(10)はまさしく、この指摘に合致する。

(10)と同じく、先に挙げた(5)では、数量でなく、性質を表わす修飾語、すなわち Dryer (2013) の定義（本稿の(1)）による《形容詞》の典型が遊離および「一致」を起こしていた。風間 (1994: 77) が遊離および「一致」の要因の一つに挙げた「談話上の必要」を考慮のうえ、どのような場合に《形容詞》の遊離や「一致」が起こるのか、注目に値する。

4.2.3 所有接尾辞-*lu* を含む語順

所有接尾辞-*lu* は、3.2.1 で挙げた例 *lauta-lu jānee; sword-PROPR official* 「刀をもった役人」（池上 2002: 67 ; Comrie 2025: 297）のように、名詞語幹について別の名詞を修飾する語を形成できる。意味上、-*lu* のつく名詞が被所有物を、修飾される名詞のほうが所有者を表わす。接尾辞-*lu* のつく語のふるまいは実に形容詞的で、限定用法も叙述用法もみられる。

この形式についてツングース諸語を含むアルタイ諸言語の比較対照や類型論における位置づけを論じた研究に、風間 (1999) がある。風間 (1999: 118-119) はウイльта語の文法書 (Petrova 1967) や辞典 (潤潟 1981) を参考にウイльта語の-*lu* (-*llu*, -*ttu*)を「『所有』をあらわす接辞」とし、テキスト資料 (池上 1984) でその用例を計量した。風間 (1999: 118) によると、池上 (1984) の全テキスト中に-*lu* (-*llu*)が 27 例あり¹⁰、そのうち「形容詞的用法」（限定用法）が 3 例、残り（24 例）は「述語的用法」（叙述用法）だったという。そして、1 例を除いてすべて道具格名詞の修飾を受けていたという (ibid.)。

Comrie (2025: 297-298)は、Petrova (1967)の巻末テキストや池上 (2002) (池上 1984 を所収) を含む資料から、接尾辞-*lu* を含む語が名詞を修飾する用例、すなわち限定用法《形容詞》のようにふるまう用例を延べ 14 例（異なり数で 8 例）報告した¹¹。そのうちの延べ 11 例（異なり数で 5 例）で《形容詞》が「分岐」(branching) しているという (ibid.)。この「分岐」

¹⁰ 風間 (1999: 118) は「-*lu* と-*ttu* は語幹末音による異形態である可能性がある」とし、池上 (1984) のテキストで-*ttu* も探したが、例がなかったという。後年に池上 (1984) を所収した池上 (2002) で筆者も検索してみたが、やはり-*ttu* の用例は見つからない。

¹¹ Comrie (2025: 297, Table 7)が池上 (2002) を出典として報告した限定用法の-*lu* の用例は延べ 7 例（異なり数で 2 例）である。風間 (1999: 118) が池上 (1984) で観察した（限定用法の-*lu* (-*llu*)の）用例「3 例」との数が一致しない理由は、現段階で不明である。池上 (1984) よりも池上 (2002) のデータ量のほうが多いこと、異形態の捉え方、統計手法の違い、などが関係するとみられる。

は、上述の風間（1999: 118）が指摘した「道具格名詞の修飾を受け」る現象におおよそ該当する。(11)はその例である。

- (11) *duji jililu sawa*
 du-ji jili-lu sawa
 two-INS head-PROPR idol
 二つの頭をもった神像（Petrova 1967: 11; Comrie 2025: 297）

Comrie (2025: 298)は、分岐をともなう複雑な内部構造が頻繁にみられる点がウイльта語の《形容詞》として非典型的であるとし、語順の調査対象から除外した。

もっとも、Comrie (2025: 297-298)で報告された延べ 14 例（異なり数で 8 例）はすべて接尾辞 *-lu* のつく語が主要部名詞に先行する。統計調査の対象から除外したとはいっても、この結果から見れば《形容詞》の支配的な語順をとる傾向が強いといえる。

他方、本稿で筆者が追調査の対象としたテキスト資料のなかで(12)の例も見いだされた。

- (12) *isugačceeri əmbee ačibi ələsini su... annoo,*
 isu-gAčceeri əmbee ači-bi ələ-si-ni # anu+bA
 come.back-CVB.CTXT of.course grandmother-1SG boil-PTCP.IPFV-3SG # FIL+ACC
pəətə ulissəni joččo-oo.
 pəətə ulisə+bA-ni joččo-lu+bA
 seal meat+ACC-3SG fat-PROPR+ACC
 帰ってから、もちろん、おばあちゃんがあれを煮ます、アザラシの肉を、脂身つきのを。
 (山田 2025: 37 ; グロス・訳を一部修正)

ここでは主要部名詞（*anu*（フィラー）ならびに *pəətə ulisə-ni* 「アザラシの肉」）が修飾語（*joččo-lu* 「脂身つきの」）に先行する、いわば NA*語順が示されている。且つ、(5)(10)と同様、対格名詞句における遊離および「一致」を示している、ともいえる。

4.3 ここまでの議論のまとめ

ここで第 4 節までの議論をまとめる。類型論の観点から行われた Comrie (2025)の調査の方法論にもとづき対象を（同一条件下で）拡張して限定用法《形容詞》と名詞の出現頻度を統計しても、個別言語記述の観点で用例の方言差や生産性・一般性を調べても、ウイльта語全体で AN 語順が支配的であるという見方が支持される。

ただ、仮に Comrie (2025)による本調査および筆者による追調査が統計対象から除外した表現、例えば数量を表わす語を含む表現や所有接尾辞 *-lu* を含む表現を考え合わせるならば、結果に多少の変化が及ぶ可能性がある。筆者の見る限り、とりわけ数量を表わす語を含む表現では「遊離および『一致』」（風間 1994）が珍しくない。そして、それと同様の現象が、統計対象内で NA*型に分類された(5)や、統計対象外の(12)でも観察された。類型論のうえではこれらの表現を調査対象から除外したことに問題なかったし、除外した表現を加えて比率

に多少の変化があるとしても、Dryer (2013)の基準 (2.1 参照) を用いる限り、ウイルタ語で AN 語順が「支配的」という結果が揺らぐことはないと推測する。しかしながら、個別言語の記述をするうえでは「支配的」でない現象にも注意を向けて行く必要がある。

5. NA 語順が容認される論理

ここまで、Comrie (2025)にもとづいた計量的アプローチが十分に有効であることが確かめられた一方で、類型論の分析手法そのものでは、考察からこぼれ落ちる現象が少なくないということも明らかになった。そのような現象を捉え、その論理を示すのは記述研究の役割である。より具体的に、本稿で取り扱ってきた《形容詞》についていえば、統計上で「支配的」な AN 語順に対し、NA 語順が一部で容認されることも事実である。そこで、本論の最後に、NA 語順が容認される論理について、記述研究を行う立場としての一考を加える。

冒頭(1) (Dryer 2013) で見たとおり、本稿で論じてきた《形容詞》は意味論的に定められていた。その後の議論も(1)を基本としたため、《形容詞》を形態統語論的な観点から文法のどこに位置づけるか、すなわち品詞分類に関する問題を保留してきた。ここに来て、ようやくウイルタ語の品詞分類を俎上に載せることができる。

ウイルタ語文法の記述研究史を概観すると、品詞として形容詞を立てるかどうかは見方によって異なる。Petrova (1967), Sem et al. (2011), Ozolinia (2013)による文法記述、ならびに池上 (編) (1997) の辞典では形容詞の項が立てられている。Tsumagari (2009)の文法概略は、形容詞に特化した章節こそ設けなかったが、統語論の章の中で “Adjective+Noun” という小節 (ibid. 10) を設け、ゆるやかに形容詞というカテゴリーを認めた。Tsumagari (2009)は、従来の文法記述で認められてきた形容詞という存在を受容しつつ、新たな見方で名詞と形容詞の境界を捉え直そうとしたのではないか。その後、Tsumagari & Yamada (2023)では形容詞を立てず、それまで形容詞とされてきた語類を「名詞類」(nominals)に収めることとなった。

本稿でいうところの NA-*ni**型と同様の構造についての記述を、Tsumagari (2009)から(13)で、Tsumagari & Yamada (2023)から(14)で紹介する。ウイルタ語表記やグロスを含め、原文のまま引用する。

(13) The following “adjective” should be regarded as nominalized: *ulaa aya-ni* [reindeer good-3S] ‘the good (best) reindeer (lit. the good one of reindeer)’. (Tsumagari 2009: 10)

(14) An adjectival nominal can also be used as a noun, in which case it can function as the head noun of a phrase with a nominal modifier, e.g. *ulaa aya-ni* ‘the good (best of the) reindeer’ (reindeer good-PX3SG). (Tsumagari & Yamada 2023: 451)

「形容詞」を名詞化するという(13)と、「形容詞的な名詞類」が名詞として用いられるという(14)とで違いがあるが、NA-*ni**型の A すなわち《形容詞》の統語論上の役割が名詞であると示唆する点で二つの記述は共通する。形態論上は A に三人称所有語尾-*ni* がついて名詞化し (あるいは名詞性を高め)、それによって “the A of N” すなわち「N の A」という、一種の所有構造を形成するという見方ができる。

NA-*ni*N*型については、テキストや例文の訳以外に、先行記述が見つからない。だが、Comrie (2025: 286)を手がかりに NA-*ni**型に主要部名詞の複製を後続する同格構文とみなせば、NA-*ni*N*型は NA-*ni**型の拡張であり、NA-*ni**型と同じ論理が適用できる。

NA-*ni**型および NA-*ni*N*型では指示対象の定性が強いと解釈できる。この解釈は(13)(14)の英訳にも反映されている。さらに、NA-*ni*N*型について 3.3.4 で参照した池上 (2002)、佐藤ほか (2014) の解釈で「N のなかでも（最も）A な N」とされたこと¹²を想起する。これらの解釈の相互の関連づけに検討の余地があるものの、NA-*ni**型や NA-*ni*N*型の使用の背景に、指示対象の定性を強調する文脈の要請があることは確かである。

残る NA*型については、用例が少ないうえ音形が疑わしい例を含むため判断が難しいが、少なくとも(5)（もし統計から除外した表現も A に含むならば(10)(12)も）については、風間 (1994) をもとに、統語論上の遊離、および、形態論上の（格の）「一致」という説明が通り、「談話上の必要」によって現れた語順と考えられる。

本論の最後に、peripheral-semantic な《形容詞》の特徴に触れておきたい。一連の調査において peripheral-semantic な《形容詞》、例えば *goropči* (*goro-pči*; old-ADJ)「昔の」や *məŋuma* (*məŋu-mA*; silver-ADJ)「銀製の」など (Comrie (2025: 290-292)および本稿の表 3.1.2 参照) については AN 語順しか確認されなかった。これらは *-pči* や *-mA* などの接尾辞の作用で形容詞性が高いことと関係するのではないだろうか。ただし、理論上は、三人称所有語尾 *-ni* の付加や格の「一致」を条件に NA 語順を容認する可能性もある。このことは、今後より多くの資料に視野を拡げて確かめてゆく必要がある。

6. 結論：まとめと今後の課題

本稿では、類型論の立場から Comrie (2025)が提示した方法論により、対象資料を増補したうえでウイльта語における限定用法《形容詞》と名詞の語順を再検証した。その結果、AN 語順が支配的であるという Comrie (2025)の主張が改めて定量的に支持された。方言差を視野に構造パターンの使用頻度を見ても、AN 語順の一般性・生産性が高い。加えて、使用頻度は低いながらも NA 語順が容認される事実を確認し、記述研究を行う立場から、NA 語順における A が形態統語論上の本質としては名詞であることを明らかにした。

《形容詞》を名詞として用いるというのは文法上の手続きであり、それとは別に NA 語順が選択される理由があるはずである。それは、なんらかの文脈の要請、あるいは、「談話上の必要」(風間 1994: 77) と考えられる。この先の語用論的な追究は、今後の課題とする。

他にも、方言差との関係 (NA-*ni*N*型が南方言の資料に限られる理由)、peripheral-semantic な《形容詞》による NA 語順が容認されるかどうか、などに検討の余地が多く残る。

本稿の副次的な目的に、既刊テキストをコーパスとする計量的アプローチを実践した Comrie (2025)の方法論の検証があった。もとより、風間 (1999) が池上 (1984) で定量的な調査をしたように、早くからコーパス基盤アプローチが実践されてきた。そのなかで、Comrie (2025)による大規模で、且つ、用例や出典をくまなく読者に一覧させる透明性の高い統計調査を含む考察は、ウイльта語の研究に一石を投じた。

¹² Comrie (2025)からの一連の調査では対象外だったが、潤潟 (1981: 127) の解釈も同様。

これまで、さまざまな研究者の手でウイльта語のデータが蓄積されてきた。国際情勢や技術の進歩が後押しして、特に 1990 年代～2010 年代にはロシア内外の研究者たちが次々とサハリンを訪れてウイльта語のドキュメンテーションを行った。だが、筆者が知る限り、公開されたテキストは小規模なものが点在している現状で、一か所にまとまった資料は限られている。この状況で、Comrie (2025) はあちこちに点在するテキスト資料を寄せ集めて自らデータセットを用意し、記述文法と照らしながらデータを丁寧に観察して自らサブコーパスを作成することで、コーパス基盤アプローチを敢行した。このやり方は「時間を浪費する仕事」(Comrie 2025: 300) で、一定の知識も必要とする。学問上の立場を越えて誰もが利用しやすいよう、十分な規模と一括検索可能なシステムを備えたデータセットを整備し公開することも、この言語の記述研究者やデータ保持者に託された重要な課題の一つである。

謝辞

本稿は、北方言語学会第 8 回大会 (2025 年 9 月 27 日) において「ウイльта語の《形容詞》と名詞の語順、および、その方言差について」と題して口頭で発表した内容を増補改訂したものである。発表を聴いてくださった方々、質疑応答や事後のメール等で貴重なコメントをくださった方々に深く感謝申し上げます。

本稿の考察は Comrie (2025) に強い動機づけを得て着手したものである。類型論の観点からウイльта語のテキスト資料に光を当て、自らコーパス調査を実践し、この言語の研究にも重要な示唆をくださった Bernard Comrie 先生に深い敬意と感謝を表す。

匿名の査読者 2 名は本稿の内容に深く踏み込んで、丁寧に誤りを正し、建設的なご意見を数多く寄せてくださった。ここに記して、心から感謝申し上げます。

グロスに用いる記号・略号の一覧 (Leipzig Glossing Rules にないもののみ)

+: 融合/=: 倚辞境界/[]: ロシア語/#: 言い間違い/ADJ: 形容詞 (性を高める) 接辞/CONN: 連結/CTXT: 文脈判断/DIR: 方向格/EXC: 感嘆/FIL: フィラー/HS: 伝聞/INTJ: 間投詞/PROPR: 所有/REV: 回帰/VBLZ: 動詞派生

参考文献

- Comrie, B. (2025) Uilta (Orok) attributive adjective order: Grammar, text, typology. In: N. Levkovych, J. Nintemann, & M. Vorholt (eds.) *Exploring Structures in Languages and Language Contact*, 275-306. Berlin/ Boston: De Gruyter Mouton.
- Dryer, M. S. (2013) Order of adjective and noun. In: M. S. Dryer & M. Haspelmath (eds.) *WALS Online* (v2020.4) [Data set]. Zenodo. <http://wals.info/chapter/87>, Accessed on 2025-11-29.
- 池上二良 (採録・訳注) (1984) 『ウイльта口頭文芸原文集』札幌: 北海道教育委員会／網走: 網走市北方民俗文化保存協会 [池上 (2002: *passim*.) 所収].
- 池上二良 (1994) 「ウイльта語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38 [池上 (2001: 247-283) 所収].
- 池上二良 (編) (1997) 『ウイльта語辞典』札幌: 北海道大学図書刊行会.
- 池上二良 (2001) 『ツングース語研究』東京: 汲古書院.

- 池上二良 (採録・訳注) (2002)『増訂ウイльта口頭文芸原文集』(ツングース言語文化論集 16) 文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-013, 吹田: 大阪学院大学.
- Ikegami, Jirō et al. (eds.) (2008) *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski. Iuzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe knizhnoe izdatel'stvo.*
- 風間伸次郎 (1994)『ナーナイ語の「一致」について』(北大言語学研究報告 5) 札幌: 北海道大学文学部言語学研究室.
- 風間伸次郎 (1999)「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について」『Altai Hakpo』9: 93-124.
- 風間伸次郎 (2011)「ウイльта語調査報告」『北方人文研究』4: 51-74.
- 澗潟久治 (1981)『ウイльта語辞典』網走: 網走市北方民俗文化保存協会.
- 森貝聡恵 (2016)「ウイльта語北方方言テキスト:『冬、父が私を連れ戻した』」『北方人文研究』9: 143-163.
- Ozolinia, L. V. (2013) *Grammatika orokskogo iazyka*. Novosibirsk: Akademicheskoe izdatel'stvo "GEO".
- Petrova, T. I. (1967) *Iazyk orokov (Ul'ta)*. Leningrad.
- 佐藤チヨ (演唱)／池上二良 (採録・解説)／山田祥子 (編訳)／E. ビビコワ (露訳)／津曲敏郎 (監修) (2014)『ウイльта長編英雄物語ニグマー: シーグーニ物語テキスト』(ツングース言語文化論集 58) 札幌: 北海道大学大学院文学研究科.
- Sem, Iu. A., L. I. Sem, & T. Iu. Sem (2011) *Materialy po traditsionnoi kul'ture, fol'kloru i iazyku orokov: Dialektologicheskii oroksko-russkii slovar'*. Vladivostok: Dal'nauka.
- Toldova, S. Iu. & M. M. Brykina (2009) Dokumentatsiia uil'tinskogo iazyka: Chto predlagaet XXI vek?. In: M. M. Prokofiev & K. Ia. Cherpakova (eds.) *Uil'ta. Evenki*, 44-53. Iuzhno-Sakhalinsk: Oblastnoe gosudarstvennoe uchrezhdenie kul'tury "Sakhalinskii gosudarstvennyi oblastnoi kraevedcheskii muzei", Izdatel'stvo "Lukomor'e".
- Tsumagari, T. (2009) Grammatical outline of Uilta (revised). *Journal of the Graduate School of Letters*, 4: 1-21. Sapporo: Graduate School of Letters, Hokkaido University.
- Tsumagari, T. & Y. Yamada. (2023) Uilta. In: A. Vovin, J. A. Alonso de la Fuente, & J. Janhunen (eds.) *The Tungusic languages* (Routledge language family series), 436-462. New York: Routledge.
- 山田祥子 (2013)「ウイльта語北方方言の文法と言語接触に関する研究」北海道大学大学院文学研究科博士学位申請論文.
- 山田祥子 (2023)「ウイльта語北方方言テキスト: お母さんのこと」『北海道言語文化研究』21: 1-16.
- 山田祥子 (2024)「サハリン先住民ウイльтаの文学(1)」『北海道言語文化研究』22: 103-120.
- 山田祥子 (採録・訳注) (2025)『ウイльта語音声資料』(Muroran Working Papers in Linguistics, No.2) 室蘭: 室蘭工業大学ひと文化系領域.

Order of Attributive “Adjectives” and Nouns in Uilta (Orok):
Applying a Corpus-Based Quantitative Approach to Structural Patterns

Yoshiko YAMADA
(Muroran Institute of Technology)

Keywords: Uilta (Orok), Tungusic, Adjective, Noun, Word Order

This study investigates the word order of attributive “adjectives” and nouns in Uilta (Orok), a Tungusic language spoken on Sakhalin Island, using a corpus-based quantitative approach. Building on Comrie (2025), who challenged WALS’s classification of Uilta as predominantly noun–adjective (NA) and demonstrated adjective–noun (AN) as the dominant order, this research applies the same methodology to different text materials and integrates the results with Comrie’s (2025) findings.

The analysis adopts Dryer’s (2013) semantic definition of “adjective” and focuses on four structural patterns: AN*, NA*, NA-*ni**, and NA-*ni*N* (following Comrie (2025)). Data were extracted from published oral texts and classified into core and peripheral semantic categories. The combined result (Comrie’s and this study’s) comprises 228 tokens/ 148 types. The result confirms AN* as the dominant pattern (77.6% of tokens/ 83.8% of types), while NA patterns collectively account for 22.4% of tokens/ 16.2% of types.

AN* is productive across dialects and includes peripheral semantic adjectives, whereas NA variants are rare and often restricted to fixed expressions or specific dialectal contexts. NA* is rare and sometimes involves cases of “floating” plus case “agreement” (terms are based on Kazama (1994)); NA-*ni** exhibits nominalized A and can be sometimes ambiguous between attributive and predicative readings; NA-*ni*N* is attested only in the southern dialect, revealing a clear dialectal asymmetry and often interpreted as “the A (best) N among Ns.”

These results corroborate Comrie’s claim that AN is statistically dominant in Uilta, while also clarifying when NA orders are licensed—notably under nominalization and discourse-driven floating. We exclude from the count’s constructions with quantificational words (e.g., *bara* ‘many’) and possessive suffix *-lu*, though preliminary observations suggest both interact with floating plus case agreement in ways relevant to NA ordering.

(やまだ・よしこ yamada@muroran-it.ac.jp)